

廣池千九郎における「普遍的なるもの」の探究

井出 元

(一)

我が国は開国以来、急激な西洋文明の移入により、宗教においても、道德観においても、価値が多様化し、国民のなかに混乱が生じた。中でも精神文化、特に宗教観や道德観などは、一人の人間にとって本人の生き方にかかわるものであることから、最も切実な問題であった。さらに国家を単位として見ても、イデオロギーの混乱は国力の低下に通じる問題であり、近代国家の設立を目指す我が国にとっては看過することのできない課題であった。

その中で、国際化していく日本の将来を考慮し、外来の宗教との根底における合意点を求め、個別宗教を超えた普遍的な宗教が求められた。この傾向は、対外的には、国際的な舞台へ進出していくための重要な前提であるとともに、日本国内における人々の思想の混乱を救うためのものでもあった。しかし、この普遍的な宗教の強調は、後に日本の伝統的な宗教・道德観を軽視したものであ

るとし、国民道徳運動を国策として展開した。そして先人は国家の真の近代化を推し進めるために日本民族の本来の姿に立ち戻ろうしたのである。

(一)

モラロジを提唱した廣池千九郎は、明治・大正・昭和を背景として、「予は国家の真の平和的な統一と世界の真の平和的な交際とを希図するものなり」と述べ（大正4年4月7日 日記）、さらに

現代は国家の時代だから国家のために働くのが一番道徳に適うのである。国際的、世界的に道徳が発達してきたから、世界的にも働かなくては道徳とはいわれなくなった。すなわち今日は非常に道徳が複雑になって、個人のためにも、家族のためにも部落のためにも国家のためにも、また世界のためにも尽くさなければならぬが、中でも国家のために尽くすことが一番大きい道徳となっている。

とも述べているように（『斯道』71号49頁 大正9年8月）、時代の流れの中で普遍的な価値を求め、国家の発展と世界の平和を願った一人の先達であった。そして、千九郎も又、先に述べた国民道徳運動に参画するのである。それは日本人にみずからの国の伝統的な精神文化を知らせることにより、国際化していく世界情勢の渦中で、日本人としての自覚を促がそうというところに主題があった。

(二)

廣池千九郎が普遍的な立場を模索する前提として、彼自身が宗教的な精神世界に接することによ

る求道の体験があった。特に天理教信徒との出会いは、廣池自身を精神的な世界へと誘うと同時に、精神的な世界における「普遍」的教理の探究へと向かわしめることとなった。宗教は教団を形成し、独自の教義を有するために、各教団は他教団との共通性を説くよりは、独自性を主張することが主であった。しかし、廣池の宗教への注目は各宗派を超えた要素への関心を深めていった。それは国内の平和、世界の平和を企図する廣池の立場であり、「宗派」を越えることはその大前提であった。この宗教的世界への傾注は、宗教の教義の道徳的な意義を問い、宗教家の道徳性を質すことに注がれていた。そこで、廣池千九郎は各宗派の祖師の研究に力を注ぎ、その人物の道徳性の高さに注目しているのである。そして、道徳は地域によって、国によって異なるのであるが、教祖・聖人といわれる人の人格の根本精神まで遡る時には、「最高道徳」という部分によって「普遍」的な要素を見出すことができると結論するのである。

次に廣池千九郎が注目しているのは、「普遍的な価値」と文化の根底に流れる国民感情との調和である。そこで「全く知を離れて、知以上の崇高偉大なる道徳的意思によってこそ世界の平和が招来する」と述べている（大正3年7月1日 日記）。「知以上」とは理性を超えるということであり、「凡そ人類の感情に本づける国家社会の風俗、習慣、礼式など科学の原理以外の道理を有して居ることを知らなければならぬ」とし、さらに「人類の感情と理性との調和によりて、始めてその生活を全うすることができるものであるということを知らねばならぬ…」としている（『物質万能主義の弊害』『斯道』第27号18頁大正5年12月16～18頁）。さらにこの「感情」の意義は「人間の生

活に温かなる血液を与え、新たな活力を加える」もので、「人をして優美快活の感を起こさしめ、特に道徳上の信仰に至りては人をして敬虔の念を高め、発奮、励精、真善美に向かつて進まんとする大勇猛真をおこさしむる」ものであり、その結果は「科学哲学の智識上の啓発以上の効果を呈することがある」としている。（『斯道』37号 大正6年）

この感情を、国家を単位としてみるならば「国民感情」となり、この国民感情としての伝統的な精神文化（価値観）を普遍的な価値の根底に置くのが廣池千九郎の立場である。中でも日本人の国民性であり、天祖―皇室に流れる「慈悲寛大自己反省」の精神は、将来にわたっての世界平和のために重要な意味をもつものであった。そして、この日本人の国民性の中に流れる温和で平和な道徳性に富んだ要素こそ平和を世界に招来する源であるとし、世界平和への提言を日本から発信するということが千九郎の課題であった。

（四）

廣池は、時代の進歩に伴う道徳の進化を説き、その進化した道徳の内容を模索した。各宗教の説く「道徳を實行すれば必ず幸福になるということ」を実証することがモラロジーを思い立った廣池の動機であった。教義の説き方は国や風土によって個性的であり、そこに国民感情の表現としての固有の文化が存在する。しかし、その源には教祖、聖人の人格には普遍的な要素を見出すことができる。したがって、国民としては国民感情に基づいて国や風土に根ざした教義を守りつつ、教祖、聖人の人格（道徳性）を目指すことによって、異国、異文化との平和的な交際が可能となる。それが、

人類の眞の安心と平和な世界の現出へつながっていく、とするのが廣池の「普遍的なるもの」を探究する立場であった。

要するに廣池千九郎が描く世界平和とは、それぞれの国民が伝統的な文化を受け継ぎ生かしつつ、自国の文化を大切にし、その上に立ってお互いの国を認めあって平和を創造していくというものであった。